



開校 68 周年

# 落 六

学校だより 574 号  
令和 8 年 6 月 1 日  
新宿区立落合第六小学校  
校長 原島 謙一  
<http://www.shinjuku.ed.jp/es-ochiai6/>

## 成長を共にして

副校長 小関 俊介

5月の連休前、玄関の外で、2年生の子どもたちがワイワイ騒いでいました。日差しが暖かく、子どもたちは鉢にトマトやきゅうりの苗を植えていました。すると、「先生、カエルがいるよ!」と喜んで教えてくれた子がいました。その子が指差した先には、ヒキガエルが一匹、佇んでいました。カエルは、下駄箱と壁の隙間で、両前足をぐっと構え、こちらを見ていました。子どもたちに追われてそこまで来たようです。私は久しぶりに大きなカエルを見ました。

聞いてみると、校門の脇のビオトープには、すでにオタマジャクシがたくさん泳いでいる、とのことでした。行って見てみると、あちらにもこちらにも、尾ひれをひらひらさせて、オタマジャクシが泳いでいました。それから休み時間、私は時々、ビオトープを覗いてみました。2週間もたつと、オタマジャクシには足が生え、ビオトープの淵に頭を向けて泳いでいました。校庭から、子どもたちが元気に遊ぶ声が聞こえていました。体育館では、体育学習発表会の練習がはじまっていました。学校は活気付いていました。

カエルは、代々このビオトープで生まれ、手足が生えたら陸に上がり、近くの茂みに隠れて、虫など食べながら成長し、また卵を生みにやってくるのかな、と思いました。サケみたいに川のおいを覚えているのかな、とも思いました。疑問を解こうとネットで検索してみると、「カエルの鼻」(石居進著 八坂書房)という本があることを知りました。私はさっそく図書館で借りて、読んでみました。

結論を言えば、「カエルは体に地図をもっており、歩いたことのある道を記憶を頼りに歩く」とのことでした。ビオトープの淵を這い上がったばかりの小さなカエルたちの体にも、道を記憶するしくみが備わっており、大人になると、それを頼りに戻ってくるということに、私は驚きました。

落六小には、季節の草花がたくさん植わっています。その茂みの中で、子どもたちが上げる歓声や校歌を歌う声や教科書を読む声を聞きながら、四季を過ごし、カエルも育てているのかな、と思います。体育学習発表会という大きな行事を経て、子どもたちは心身共に自信を付け、学級や学年の友達や先生方と、楽しく深く関わり、成長することができました。今月は学校公開があります。子どもたちが楽しみにしている、水泳も始まります。保護者の皆様や地域の皆様に、子どもたちの生き生きとした姿を見ていただきたいと思います。ご来校お待ちしております。

### ～離任のあいさつ～

#### 主幹教諭 有間 千枝子

お別れの会で「別れの涙は思い出の証だ」という話をしました。落六での6年間を振り返ると、数えきれないほどの出来事があり、幸せだったなど涙がこぼれました。落六小の子どもたちの成長に関わらせていただき、私自身も多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

#### 教諭 金子 大輔

1年間という短い期間でしたが、低学年の子どもたちと図工の学習を一緒にしてきました。また、落合第六小学校では、図工の授業だけではなく、低学年の国語の研究授業にも関わらせていただきました。様々な場面で児童の成長と関わらせていただいたことを感謝しています。ありがとうございました。

今まで ありがとうございました!